

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



### Vol.44 喉が渴き 食べても痩せる

「ヘモグロビン A1c が 10.6 ? いったいどういう事よ ! 」

近藤姫は顔を真っ赤にして看護師に当たり散らかしている。

「何なん、あの医者。人の事をまるで人間失格みたいな言い方して。腹立つ〜。ヘモグロビン A1c が 10 のどこがいかなの? え〜っ。悔しかったら 50 字以内で説明してみ〜や。」

「あの〜近藤さん。あなたのヘモグロビン A1c は 10.6% なんですけど」

「あ〜腹が立つ〜。10 でも 10.6 でもい〜やん。そんな誤差範囲や。」

「落ち着いてください。近藤さん。」

「私はとっくに お・ち・つ・い・て・い・ま・す。」

と言いながらも姫の頭からは湯気が出っ放し。どうも糖尿病の先生に強く言われたのが癢にさわるらしい。

「近藤さん。喉が渴かない? 」

「そりゃー、渴くよ。こんだけ興奮したら。」

「そ〜じゃなくて、普段喉が渴いて水をよく飲まない。トイレの回数は多くなってない? 」

「なんで分かるん。」

「体重は? 食べているのに体重は減ってきてない? 」

「看護師さん。よく分かるね。うちな、やっところんところ運がついてきたと思っと思ったんよ。食べてるのに痩せるって。こんなダイエットもありなんや、世の中捨てたもんと違うでって思っと思ったんよ。やっとうちにもツキが回ってきたわ〜って。」

「近藤さん。それはツキじゃなくて、かなり危険なサインなの。」

「え〜〜〜。。。。。。なんで? 」

「糖尿病が酷くなると食べていても体重がどんどん減っていくの。これは糖代謝が破綻してしまった状況で、近い将来意識がなくなる前兆なの。」

「え〜〜 !! 意識がなくなるの〜 ! 」

「極度の脱水状態になっているのよ。身体の中は。自分では気が付かないかもしれないけどね。先生はこのままでは大変なことになるからきつくおっしゃったのよ。」

「私、これからどう〜なるの? 」

姫は不安を隠しきれずに担当ナースを見つめていた。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一